

3 層分裂 VP 構造に基づく動作主の表示—北海道方言ラサル構文を例として—

七条乙衣 (津田塾大学 学部生)

要旨

本研究は、北海道方言ラサル構文におけるラサル接尾辞の意味構造について統語的分析を行うものである。北海道方言には、他動詞と自動詞を含めた基体動詞にラサルという接尾辞を接続して自発を表すラサル構文が存在する。このラサル構文の中で、「～ために」という表現が共起している現象が Niinuma and Takahashi (2013)において報告されている。「～ために」という表現は統語構造内に含意的動作主が表示されていることで可能になる表現だが、現時点で先行研究ではラサル構文に含意的動作主が表示された統語構造は提案されていない。本研究では、「～ために」という表現が共起可能となる現象を解明する。これにあたり、藤田・松本(2005)で提案されている、中間動詞の派生における3層分裂VP構造をラサル構文に適用し、含意的動作主を表示させた新たな統語構造を提案する。

1. はじめに

北海道方言のよく知られる文法的特徴の1つに、(1)のように動詞に接尾辞サル・ラサル（以下「ラサル」）を付けて自発の意味を表す構文（以下、「ラサル構文」）が存在する。

(1)a. ドを弾こうとしたら、レが弾かさった。

=ドを弾こうと思っていたのにレを弾いてしまった。

(円山 2016: 245 を発表者により意味を追加)

b. あいつの後付いて行ったら走らさつちゃう。

=あいつの後を付いて行ったら、つい走ってしまう。

(山崎 1994: 231 を発表者により意味を追加)

ラサルは「書かざる」「押さざる」などといった他動詞への接続が多く見られるが、(1)bにも見られるように自動詞にも接続することが可能である。加えて、発表者は自動詞を非能格自動詞と非対格自動詞の2つのクラスに分け、「泣く」や「壊れる」といったそれぞれの動詞クラスの典型的な動詞を17個ずつ抽出し、容認性判断課題を調査として行った¹。本調査における調査対象者（以下、「被験者」）は全員、北海道方言話者（非能格自動詞10人、非対格自動詞8人）に限定している。被験者に使用コンテキストを発表者から与え、非能格自動詞と非対格自動詞それぞれにラサル接尾辞が接続することで、自発の意味が導出されるのかどうかを判断させたところ、どちらの動詞クラスにもラサルの接続による自発の意味の導出が認められることを確認した²。

本研究では、Niinuma and Takahashi (2013)において報告されている以下の用例に着目する。

¹ 非能格自動詞・非体格自動詞の抽出の際には、影山(1993)にて提唱されている「動詞+するにおけるヲ格の割り込み」「数量詞の解釈」「格助詞の脱落」「使役受身」「間接受身」を判断テストとして用いた。

² 発表者が与えた使用コンテキスト以外に、被験者側から自発の意味が導出可能となるコンテキストが提供された場合においては、そのコンテキストを尊重し、結果として記録している。

(2) 公民館を建てるためにたくさんのお金が集まらさった。

(Niinuma and Takahashi 2013: 303 を発表者による改変と下線の追加)

この用例の特筆すべき点は、「～ために」という表現が含まれている部分である。この「～ために」という表現の出現を可能にするためには、動作主が統語構造上に表示されている必要がある。発表者は、この問題について藤田・松本(2005)において提唱されている3層分裂VP構造を適用して統語的に分析する。そして、接尾辞ラサルによって導出される自発の意味構造について、統語構造上の分析から新たな構造の提案を行う。

2. 先行研究

2.1 佐々木(2015)における到達アスペクト自発態の分析

ラサル構文についての統語的な分析として佐々木(2015)による、到達アスペクト自発態の構造についての提案がある。佐々木(2015)では、自発態には「動作の非意図を表す用法」「可能用法」「到達アスペクト自動詞派生用法」の3つの種類があることを示している。各用法の用例を以下に示す。佐々木(2015)では、この中でも特に(3)cにある「到達アスペクト自動詞派生用法」に着目している。「到達アスペクト自動詞派生用法」とは、他動詞から自動詞を派生する方法である。他動詞目的語は主語位置に繰り上がり、他動詞主語は削除される。

(3)a. 私は御飯が食べらさる。[非意図]

b. このペンはよく書かさる。[可能]

c. 大きな丸が描かさってる。[到達アスペクト自動詞派生] (佐々木 2015: 178)

この「到達アスペクト自動詞派生用法」が使われているラサル構文について考えるにあたり、到達アスペクト自発態についての提案に言及する。佐々木は到達アスペクト自発態の特長の1つとして、その意味的効果が使役事象の削除であり、(4)に示すように動作主が削除されているという統語的特性からも支持できるとしている。ラサル構文においてもその特徴を見ることができる。

(4) メールを送ろうとしたけど、(*私には) 送らさらなかった。 (佐々木 2015: 179)

佐々木は、到達アスペクト自発態における使役事象は意味的に削除されているが、そもそも、使役事象自体の統語構造への反映が抑制されていると提案している。これを図に表すと以下のようなになる。

(5) [~~do' (x)~~] CAUSE [BECOME pred' (y)] (佐々木 2015: 198)

この到達アスペクト自発態の構造を北海道方言ラサル構文の「到達アスペクト自動詞派生用法」に適用すると、以下のようなになる。

(6) [DO (x, [~~do' (x)~~])] CAUSE [BECOME pred' (y)] (佐々木 2015: 201)

(5)と同様に使役事象となる部分が削除されていることが分かる。同様の削除が(3)aのような非意図にも適用され、意図性を表すD0の削除となる。

(7) ~~D0~~ (~~x~~, [pred' (x)])] (佐々木 2015: 201)

しかし、既述の通り、(2)において見られる「～ために」という表現を可能にするためには統語構造上に動作主の表示がなければならない。佐々木(2015)の提案では、使役事象を統語構造内から完全に削除しているため、動作主はその構造内に表示されることがない。したがって、(2)の用例が可能となることを説明することができない。

2.2 Niinuma and Takahashi (2013)における Voice Head 分析

ラサル構文における自発の意味の導出について統語構造で表した分析として Niinuma and Takahashi (2013) による Voice Head 分析がある³。Niinuma and Takahashi では、(8)のような構造を用いてラサル構文の自発の意味の導出を試みている。

(8) [_{VoiceP} external causer [_{Voice'} external cause [_{VP} [_{NP} internal argument] [_{V'} root, V]]]

(Niinuma and Takahashi 2013: 309 を発表者により改変)

(8)の構造において特筆すべきところとして、Voice Head の位置に原因項 (external cause) が置かれており、動作主 (agent) が表示されていないことにある。この構造により、ラサル構文には動作主の意図性が反映されず、自発の意味を導出することが可能になるとしている。また、Niinuma and Takahashi はこの構造の証拠として(9)の例文が非文になることを示している。

(9) *その戸はこの鍵で開かされた。 (Niinuma and Takahashi 2013: 311)

(9)の用例にある「この鍵で」の部分における「～で」という表現は、統語構造上に含意的動作主 (implicit agent) が表示されている必要がある。しかし、「～で」という表現の共起が不可能であるということは、統語構造上に含意的動作主が表示されていないことが原因であると考えられる。したがって、動作主が表示されずに原因項のみが表示されている(8)の構造を支持する。

しかし、(2)において使われている「～ために」という表現は、統語構造上に含意的動作主が必要となる。そのため、(8)に示されていた原因項のみが表示されている構造では、(2)が容認されることが説明できなくなる。

3. 分析

本研究では、藤田・松本(2005)の3層分裂VP構造を適用し、自発の意味を導出する接尾辞ラサ

³ Niinuma and Takahashi(2013)において分析されているラサル構文は、北海道方言ではなくケセン語(岩手県方言の一種)のものである。しかし、本堂(1982)にて岩手県方言について確認したところ、自発の意味の導出に関しては北海道方言と同様のものが観察されている。したがって、本分析で取り上げるにあたって、支障のないものであるとする。

ルにおける新たな統語構造を提案する。

藤田・松本(2005)では、中間動詞の派生として以下の統語構造を提案している。

(10) [TP Obj T[_{μP} t_{obj} μ [vP1 Agent (=Subj1) v1...[vP2 φ v2[_{VP} V t_{obj}]]]]]

(藤田・松本 2005: 109 を発表者により一部改変)

(10)の構造には、vP1のSpecであるSubj1 (=Subject1)の位置に含意的動作主のθ表示がなされていることが分かる。加えて、vP2のSpecは原因項のθ表示位置であるが、(10)の構造では何も表示されていない。藤田・松本は、(10)のような構造の場合において、含意的動作主は発音されない代名詞であるPROとして統語構造上に存在しており、Subj1に位置付けられている含意的動作主に相当することを指摘している。このことを表したものが(11)になる。そのため、中間動詞では(12)のような表現が可能となることが説明できる。

(11)a. Walls paint easily.

b. [TP walls T[_{VP} PRO [v' paint t easily]]]

(藤田・松本 2005: 119 を発表者により一部改変)⁴

(12) This car fixes easily even unaided. (藤田・松本 2005: 118)

以上の分析を、ラサル構文に適用する。(10)の構造をラサル構文に適用すると、(13)のような構造が導かれる。

(13) ...[vP1 Agent (=Subj1) v1...[vP2 φ v2[_{VP} V + -(r)asar (t_{obj})]]]]

Subj1の位置に含意的動作主のθ表示をさせていることに加え、やはり原因項には何も表示していないことで、前項にて言及した(2)の用例に見られる「～ために」の表現が可能となる。これらの点でNiinuma and Takahashiの分析と異なっている。含意的動作主が統語構造上に表示されるということは、即ち、(6)や(7)に見られた使役事象を表すCAUSEや意図性を表すDOの削除は起きていないことを表す。この点で佐々木(2015)の分析と異なっている。

(13)の構造が適用された際、含意的動作主はPROとして発音されていないことが考えられる。(2)の例文内にPROを置いて表したものが(14)である。

(14) ...[TP たくさんのお金が T[_{VP} PRO[_{v'} 集まる + -(r)asar (t_{obj})]]]]

PROを置くことで、お金集める行為をした含意的動作主が統語構造上に表示されていることがより明白になる。

⁴ 藤田・松本(2005)内では(11)bにおけるPROは*pro*で表記されているが、本発表内ではPROの表記を用いることとする。

その一方で、(9)の用例に見られる「～で」の共起が不可能であることの説明としては「～で」という表現が動作主の様相を修飾することで動作主の存在が強調されることに問題があると考えられる。藤田・松本は中間動詞では、(15)に示されるような *deliberately* と言った動作主指向型副詞との共起が不可能であることの指摘と一致する。

(15) *Bureaucrats bribe easily deliberately.* (藤田・松本 2005: 119)

動作主指向型副詞は、動作主の意図を明確にすることになる。そのため、(10)の構造でも示されているように、主語の主題役割が動作主であると限定されているにもかかわらず、統語構造上における主語が動作主であることを改めて主張することが問題となると藤田・松本は指摘している。藤田・松本の指摘を適用すると、同様のことをラサル構文における「～で」の共起についても指摘することができる。(9)における「鍵で」という表現は、「鍵で戸を開けた」という動作を修飾することになり、「戸が開いた」という結果状態が動作主の意図をもって引き起こされたものであるということが強調される。しかし、動作主の意図性が明確になるということは、ラサル構文から導出される自発の意味と矛盾が生じることになる。したがって、共起が不可能になると考えられる。

4. 今後の課題

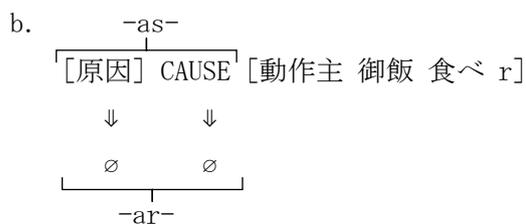
今後の課題として、次の2点が挙げられる。

1点目は、統語構造内における動作主表示の更なる証拠の発見である。今回、言及した「～ために」という表現は、含意的動作主が統語構造内に表示されていることの証拠の1つとして有力なものであるが、その他にも含意的動作主が統語構造上に表示されていないと不可能な表現を調査することが必要となる。調査にあたっては、新しい表現の発見も行っていくが、同時に Niinuma and Takahashi (2013) において共起不可能であるとされていた「～で」についても再検討する。本分析においても、「～で」はラサル構文によって導出される自発の意味との矛盾が生じるとの見解を示したが、使用コンテキストによっては共起が容認される可能性もあるため、検討の余地はあるだろう。調査については、北海道方言話者への容認性判断課題を実施する。被験者に対して、発表者からコンテキストを提示し、そのコンテキスト下で「～で」の共起が可能かどうかを調査する。もし、発表者が提示したコンテキストの他に、被験者側から「～で」の共起が可能なコンテキストが提示された場合には、そのコンテキストを尊重する。「～で」以外の新しい表現の共起についても同様の調査を行う。これにより、統語構造上での含意的動作主の表示をより明白なものとする。

2点目はラサル構文における項の減少についての言及である。ラサル構文において結合価が減る現象については、これまでも先行研究において指摘されている。本研究の中で取り上げた佐々木 (2015) の他にも、並木 (2022) などがある。並木 (2022) では、ラサルを使役化接辞の *-as-* と自動詞化接辞の *-ar-* の独立した形態素によって構成されていることを提案している。そして、*-as-* によって原因項の意味役割を表す使役事象が導入され、*-ar-* によって外項が抑制されていると分析している。並木 (2022) の分析を図式すると以下のようなになる。

(16) a. 御飯が食べらさる。

= 御飯が *taber-as-ar-u*



(並木 2022: 6 を発表者により一部改変)

並木(2022)では、ラサル接尾辞が-as-と-ar-の形態素に分解するという提案を、統語的に動作主を表示できないことの証拠として挙げており、(16)からも分かるように、並木が提案した統語構造にも動作主の表示がない。しかし、(16)の構造では本研究において取り上げた(2)の用例を説明することができない。本研究の今後の課題として、統語構造上に含意的動作主を表示させるという立場をもって、結合価の減少についての分析を行っていく必要がある。今後も、藤田・松本(2005)の3層分裂VP構造を起点として、結合価の減少についての見解を示していく予定である。

5. 終わりに

本発表においては、まず北海道方言ラサル構文における1つの用例として(2)で取り上げた「～ために」という表現を使用した例に着目した。この用例を分析するにあたり、ラサル構文に関する統語的分析として、佐々木(2015)とNiinuma and Takahashi(2013)を概観し、それぞれの分析における問題点を指摘した。次に藤田・松本(2005)にて提唱されている、中間動詞の派生における3層分裂VP構造に基づき、含意的動作主を統語構造上に表示させるという新たな提案を行った。最後に、4章にて本分析を裏付けるために必要となると予想される課題を示した。これらの課題を検討し、本分析をより発展させていきたい。

参考文献

- 藤田耕司・松本マズミ『語彙範疇(Ⅰ) 動詞』研究社、2005年。
- 本堂寛「岩手の方言」『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』飯豊毅一、日野資純、佐藤亮一編、国書刊行会、1982年、237-268。
- 影山太郎『文法と語形成』ひつじ書房、1993年。
- 並木翔太郎「ラサル文における結合価減少と格標示-非意図用法を中心に」『札幌市立大学研究論文集』16巻1号、2022年9月、3-12。
- Niinuma, Fumikazu and Hideya Takahashi “External Cause and Structure of vP in Japanese Dialects and Korean.” *Proceedings of the 15th Seoul International Conference on Generative Grammar* 1(2013): 297-316. Print.
- 円山拓子『韓国語citaと北海道方言ラサルと日本語ラレルの研究』ひつじ書房、2016年。
- 佐々木冠「北海道方言における形態的逆使役の類型的な位置づけ」『認知日本語学講座第6巻 認知類型論』山梨正明、吉村公宏、堀江薫、靱山洋介編、くろしお出版、2015年、163-209。
- 山崎哲永「北海道方言における自発の助動詞-rasaruの用法とその意味分析」『北海道方言研究会20周年記念論文集 ことばの世界』小野米一編、北海道方言研究会、1994年、227-237。